ことからこの日が設けられたものでございます。

本日も多くの防災に関する関心の高い自主防災の組織の皆様、そして防災ボランティアの皆様に多くご参加いただいていると伺っておりますが、皆様がいざというときに力を合わせて、まずはみずからを守る。そして地域全体を守るという形で活動していただければと思っております。

私ども愛知県におきましても、南海トラフを震源とする巨大地震の発生が非常に懸念をされているわけでございます。私どものほうも被害予測調査を行いまして、それを踏まえた形で地震対策を進める第３次アクションプランを策定いたしました。その中で特に皆さんにとって身近な対策として、今重点的に取り組んでいる項目がございます。それは家具等の転倒防止対策でございます。もちろん本日お集りの皆様方は防災、減災に非常に関心の高い方々でございますので、そういったことは対応されていると思いますが、ぜひ、また皆さんのご近所の方、またはお知り合いの方で、まだまだそういったことができていないという方がございましたら、ご案内をいただきたいと思います。私ども県に、昨年９月１日から防災局の中に、家具固定相談窓口を設置をいたしまして、さまざまなご相談を受け付けております。また、家具固定に取り組まれているボランティアの方々を、家具固定推進員としてご登録をいただきまして、いろいろな地域への講演会とか防災訓練、そういったところにご足労いただいて、家具固定器具の取りつけの実演とか啓発活動を実施していただいております。どうか皆さんのところで、もしそういったことがありましたら、ぜひ防災局のほうにお問い合わせをいただきまして、取り組みを進めていきたいと考えております。

本日は先ほどご紹介がありましたように、名古屋大学減災連携研究センター長の福和先生をお招きをしまして、「巨大地震を前に総力と本気の地震対策」をテーマにご講演いただきます。

また、災害ボランティアの第一線でご活躍されております、認定特定非営利活動法人レスキューストックヤード代表理事の栗田様に、「災害ボランティアと避難所運営」をテーマにご講演をいただきます。この講演をきっかけに、皆様におかれましても、ぜひ災害に対する備えや災害ボランティアの理解を深めるとともに、防災への意識を高め、この地域が一層災害に強い地域となるよう、皆様お一人一人がさまざまな防災、減災に向けた活動に取り組んでいただくようお願いを申し上げまして、私からの開会に当たってのご挨拶とさせていただきます。

本日はどうかよろしくお願い申し上げます。

◎講演①

講演者：名古屋大学減災連携研究センター長・教授　福和伸夫
演　題：「巨大地震を前に総力と本気の地震対策」

皆さん、こんにちは。

まず、今日の会場の建物を確認しましょう。安心して講演会を聞いていていいのかどうか、確認が必要だと思い、この建物の建築年を調べました。この建物の建築年を見てから、この建

物に入ってきた人、手を挙げてみてください。

福和伸夫氏

これで皆さんがまだまだ防災のプロとしてはちょっと役者不足であるということがわかります。どんな建物に入るときにも、その建物が安全かどうか確実にチェックをして入ったほうがお得だと思います。この建物の外観写真です。入口のところに、「定礎」という石がありました。帰りにご確認ください。昭和62年10月に竣工と書いてあります。新耐震建築なので、それなりに安全な建物であるが確認できます。ただ、そこにいらっしゃる斎藤防災監から伺ったところ、まだ天井は直していないそうです。今揺れると皆さんは天井の下敷きになる可能性がありますので、強く揺れたら、椅子の背もたれの間に伏して下さるようお願いします。平成28年度中に天井の工事をしてくださるそうですから、来年からは安心して講演会を聞いていただけるのではないかと思います。

先ほどご挨拶された加藤局長さんは、今年度最も重要な愛知県の施策は家具の転倒防止だとおっしゃっいました。そこで、それもチェックしてまいりました。この建物の事務室です。一度は留めたらしいんですが、今はこれ、金具だけでねじで留まっていません、どうも引っ越したときにつけ忘れたようです。この食器戸棚はいかにも固定してように見えますけれども、全くだめでした。出入り口のところで写真を撮っている高柳さんという方が、この家具の転倒防止を推進している愛知県庁職員なのですが、高柳さんは写真をとることに一生懸命で、肝心のチェックをし損なっています。ということで、まだ愛知県の施策への魂の入り方には改善の余地があることがわかります。。

このロッカーも、この建物の事務室にありますが、前の席の方に危険ですよと申し上げたら、後ろを振り向いてくださいました。ちょっと嫌そうな顔をされましたが、机の下を見ていると、もぐるスペースがないということもわかりました。最初から、嫌な話ばかり申し上げておりますが、これらはあら探しの結果見つかったもので、この建物のほとんどの家具はちゃんと留められていました。ですから、この建物の対策は相当よくできています。さらに気を引き締めましょう、ということで、いきなり嫌なことを申し上げました。。

実は私たち、防災対策というのはなかなか言ってもやれないものです。理由は、面倒くさいからです。僕はとてもいじめっ子ですから、少し具合の悪いところを探し、こんちくしょうと思っていただいて、対策をしていただこうという意図で、こんなことをいつも申し上げます。

さて、私たち、過去からいろいろな災害と向き合ってまいりました。例えば今週一週間は大変な一週間であります。実は１月12日、１月13日、１月17日に大きな災害がございました。今から102年前の１月12日に、巨大噴火がございました。大正の桜島噴火でございます。このとき気象台の人たちは噴火しないと言ったのですが、実際には噴火してしまって、科学者への不信感が大きくなりました。

そして１月13日は何の日だったでしょうか。覚えていらっしゃるでしょうか。

○会場　三河地震。

○福和先生　はい、すばらしい方です。1945年１月13日に三河地震が発生しました。ですから、本来、防災とボランティア週間は、愛知県だけは１月13日からにしたほうがよいと個人的には思っております。そして1995年１月17日が阪神淡路大震災。そういう３つの大きな災害があった特別な１週間でございます。

私たちの国ではたくさんの地震災害を経験してきております。20世紀以降に我々が経験した３つの大震災、１つ目は関東大震災です。マグニチュード7.9と、東日本大震災ほど大きな地震ではありません。規模は30分の１です。ですが、10万人が亡くなりました。当時の我が国の人口6,000万人に対して10万人です。東京では７万人亡くなりました。当時、東京の人口は200万人です。200万人で７万人です。ということは、今この程度の地震が起きれば50万人ぐらい東京で死ぬ可能性があるということです。実はこの関東地震、東京直下の地震ではありません。小田原のあたりに震源があります。すなわち私たちの首都・東京はちょっと離れた場所での地震で、何十万人もの命を落とす可能性がある場所であるということです。そういうところに今や千数百万人も住んでいる。これは、多くの人が東京に憧れて出かけて行ったことに問題があります。それを避けるには、この半田のまちのように、まちの魅力をどんどん高めて、若者がまちに魅力を感じ、住み続けたいと思うようにすることがとても大切だということです。

21年前、神戸で地震がありました。マグニチュード７ぐらい。東北の地震と比べれば1,000分の１の地震です。ですが、10万の家が壊れ、6,000人の方が亡くなりました。余り大きな地震ではありません。これ以降、11回以上、マグニチュード７クラスの内陸直下の地震が起きました。ですが、神戸の地震以外を全部足してもは犠牲者は100人位です。理由は単純です。人が余り住んでいないからです。人がいっぱい住めば、当然、危険な場所にまちが広がるわけです。昔の人たちは安全な集落にしか住んでいません。家がくっついていなければ、火災は延焼しません。くっついていれば全部燃えてしまいます。

そして５年前、大きな地震が起きました。でも壊れた建物は、神戸の地震で壊れた建物の数と余り変わりません。人がいっぱい住んでいないからです。災害というのは、地震という自然現象が引き起こしますが、災害を大きくするのは我々の生活の営み方です。その結果、同じマグニチュード９の地震が人がいっぱい住んでいる南海トラフで起きると、最悪、30万人を超える犠牲者になるという報告が国からなされたわけです。そして、被害総額は200兆を超えるということになっているわけであります。こんなものが来たら、もうこの国は破綻しそうということが容易に察せられます。

一方で、こちらの首都直下地震、被害は少なめに見えます。どっちも科学的には間違っていませんが、そもそも被害予測には、10倍ぐらいの幅がありますから、数字を信じ切らないことも大切です。

さて、今の時代はどうも1150年前とよく似ているという指摘もされています。1150年前には、越中の地震、越後の地震、富士山の噴火、阿蘇山の噴火、そして播磨山城の地震、貞観の地震と続きました。貞観の地震は東北の地震です。余り大変な地震や災害があったので、祇園で御霊会があり、これが祇園祭りの発祥と言われています。この地震の直後、鳥海山が噴火し、開聞岳が噴火、さらに関東で大地震、出雲で地震、千葉安房の国の地震があって、南海トラフ地

震です。何だか私たちの今の時代と似ています。もうこれも終わりましたし、これも終わりましたし、これも終わったし、これも終わりました。そして開聞岳の近くでは３つ噴火しました。もうすぐ来るかもと言っているのは、南海トラフと首都直下です。何だか気持ち悪いなとも思います。

869年の貞観の地震が起きた後、こんな歌が歌われました。

「契りきな　かたみに袖をしぼりつつ　末の松山　波越さじ」「わが袖は潮干に見えぬ沖の石の　人こそ知らね乾く間もなし」という和歌であります。

小倉百人一首の中にありますから、皆さんもよくお詠みになっている歌です。

私たちはこの歌を恋の歌であるというふうに勉強していました。ですが、実際に末の松山と沖の石へ行ってみると、２つの場所はとても近いところにあって、そして今回の東北の地震では津波がここまで来ていました。この和歌のとおり、末の松山は津波が越していなくて、沖の石は津波で乾く間もない状況でした。1150年前の人たちは、こんなすごいメッセージを僕たちへ残してくれていたのかもしれません。

この５年の間にこんなにいっぱい噴火をしました。阿蘇山、霧島の新燃岳、桜島、口永良部島、そしてさっき年表にあった開聞岳というのはこれです。一直線に並んでいます。たった５年間の間にこれだけ噴火をしてまいりました。何だか不安になります。

昨年１年間だけで、こんなことがありました。西の島が噴火してどんどん大きくなっています。口永良部島ではマグマ水蒸気噴火が５月29日にありました。その噴火した場所はここです。この場所では今から7,300年前、破局的な噴火をして、この場所にも火山灰が20センチぐらい積もりました。火山灰が20センチ屋根に積もれば、弱い家は潰れます。これで西日本は厳しい状況になりました。縄文文化が東日本に偏っているというのはこんなところに理由があるのかもしれません。九州ではときどき破局的噴火があります。２万5,000年前にも桜島の破局的噴火、９万年前にも阿蘇の破局的噴火などです。九州は数万年に１回壊滅してきたということです。私たちは、そういう国に住んでいるということを忘れないようにしておくということが肝心だと思います。

そしてこの口永良部島の噴火の翌日、この西之島の真下小笠原の地下700ｋｍでマグニチュード8.1の地震が起きました。この地震で日本の全ての都道府県で震度１以上の揺れとなり、東京では２万台のエレベーターがとまりました。エレベーターに頼る社会の脆弱さがわかりました。そして１カ月後の６月30日、箱根が小噴火をしました。８月15日、桜島が噴火レベル４になりました。９月10日、すさまじい豪雨が常総市を襲いました。あのとき見ていると、流された家は新しい建物ばかりで、古いお屋敷は流されていませんでした。古いお屋敷は自然堤防の上だったのに対し、新しい建物は後背湿地の低地だったので流されたと思われます。そしてその４日後、桜島ではなく、阿蘇山が噴火をしました。そして３日後、チリで大地震が起きて津波が私たちの地域までやってきました。たった１年間でこれだけの災害がありました。500年とか1,000年に１回しか起きないと言われるような巨大災害が起きた後だから、災害が多いのか、普段もこんなものなのか、少し考えたいものです。

霧島火山帯で噴火が続くので、去年こんな本を読みました。「死都日本」です。この本は

2002年に書かれました。新燃岳の噴火の９年前に出版されたのですが、最初の出だしは新燃岳の噴火、次に霧島の破局的噴火、九州が壊滅して、それに引き続いて南海トラフ巨大地震、さらに富士山が噴火、そんな小説でありました。石黒耀さんも随分すごい小説を書くなと当時は思っていましたが、去年読み直してみると、よくぞここまで予想していたなとも感じます。よろしければ一度ごらんになるといいと思います。この本の裏側のメッセージは、宮崎の神々の伝説です。どうも降臨伝説と噴火とは関係がありそうだよねというようなことです。

さて、今年はどんな年かというと、実は300年前に徳川吉宗が将軍に就任をいたしました。徳川吉宗は、1707年の宝永の南海トラフ巨大地震、その49日後の富士山の噴火が起きたときに紀州の徳川家の藩主でした。彼は宝永の南海トラフ巨大地震の後始末を見事にして、紀州を立て直し、それが認められてお江戸に出ていったとも言われています。そして将軍になった彼は享保の改革を成し遂げました。その中で、町火消しの制度、火除け地の制度、そして防火建築というのを彼が主導をいたしました。ですから防災にとっても極めて重要な人であります。

100年前は、第一次世界大戦の真っ最中でありました。今年が十周年を迎える災害・事故は、50年前の全日空羽田沖墜落事故、日本で初めてのジェット旅客機事故であります。これ以降、フライトレコーダーを必ずつけるようになりました。そして、３月は東日本大震災から丸５年。４月はチェルノブイリ原発事故から30年。史上最悪の原発事故と言われていましたが、同じような最悪の事故を日本でも起こしてしまいました。そして７月は唐山地震から40年。これは20世紀最大の死者を出した中国の地震です。そして９月12日、我々の近く、長良川が決壊した安八水害というのがありました。これで輪中が大事だということが改めて見直されました。10月29日、酒田大火から40年です。東北山形の酒田というまちが火に包まれました。これ以降、都市大火というのは地震以外では起きていません。そして11月３日、憲法公布70年。11月には伊豆大島の三原山が大噴火をいたしました。それから30年。そして12月21日、昭和の南海地震から70年を迎えます。意外といろんな災害があったことに気がつきます。

さて、神戸から21年になります。じゃ、この20年間でこの社会がどう変わったかを見てみます。若者が２割減り、正規雇用者が２割減り、医療費が1.5倍になり、結果として国の借金が３倍になりました。今や国民１人当たりの借金は800万円にもなっています。800万円も借金している国で堤防をつくってもらえるはずがないなんて、少し考えれば当たり前です。こんな中、私たち国民は、増税を先送りするという選択をいたしました。結局、若者たちにつけを回すことになります。大切なことを先送りにする国民だと思います。残念ながらこの20年、日本は全く豊かになっていません。その中で便利さばかりを追い求め、コンビニを倍にしました。コンビニが増えるということは、社会の備蓄が減るということです。ファミリーレストランが３倍になります。これは家の中の食料や水の備蓄が減るということでもあります。何だかとても心配です。

一方で、あらゆることを電気に頼るような社会をつくってしまいました。火力発電所は危険な埋立地に建っています。だから私は、電気代を増やしてでもめちゃくちゃ安全にして欲しいと思います。ですが、我が国は電気のような大事なものまで自由化して価格競争をするようにしました。これでは、いざというときに電気が来ないかもしれません。ですが、こういう中、

中部電力は、自由化の前に1,000億円もの金を使って耐震化工事をしています。これは多分、地元愛がある企業だからだと思います。ありがたいことに中部電力は高潮対策として標高の高い位置に火力発電所をつくっています。そういう地元愛と事前対策がとても大切だと思います。安いことが本当にいいことなのか、それとも確実に電気をもらえるほうがいいことなのか。どういう価値観を持つべきかということが問われています。

堤防。残念ながら耐震性は十分にありません。堤防で守られたところは強い揺れで水につかる可能性があります。揺れなくても、一級河川の鬼怒川は決壊しました。国直轄の堤防だって破堤しました。だから、海抜ゼロメートル地帯は大変です。液状化もします。液状化すると、水道もガスも使えなくなってしまいます。そういうところに住む作法は、水道がなくたって大丈夫なように水を備蓄をしておく、ガスが来なくたって大丈夫なようにちゃんと携帯コンロを用意しておくことであります。家を密集させれば、当然１軒燃えれば延焼します。液状化するところには消防自動車は来れません。残念ながら半田消防署は、ちょっと液状化しやすい場所にあります。ということは、私たち住民が絶対に火を出さないようにするということが大事だと言うことです。また、高いビルはよく揺れるので、災害時に大事なものは避けた方が良いと僕は思っております。

そんなことを実感するかどうかで、私たちの生き方は随分違ってまいります。残念ながら、揺れれば弱い建物が壊れます。水辺は水に襲われます。そしてこういうふうな風景になってしまいます。特定の場所の被害が大きくなります。それは災害危険度の高い場所です。理由は単純です。私たちの国の法律では、基本的にどこにでも同じ建物をつくっていいですから、安全なところにある建物と危険なところにある建物が同じなんですから、危険なところにあるほうが壊れることになります。だから住む場所を気をつけるということが基本であるということです。

そんなことを寺田寅彦は明快に今から80年前、こう言っています。「文明が進めば進むほど、天然の猛威による災害がその激烈の度を増すという事実。災禍を起こさせたもとの起こりは天然に反抗する人間の災害である。嫌が上にも災害を大きくするように努力しているものは誰あろう、文明人そのものなのである」というふうに言っております。

ということで、僕の場合はどうしたかというと、自分の身は自分で守るという社会になったんだと解釈をし、安全な家に年末につくりかえました。屋根には５キロワットの太陽電池を乗せ、ここでつくった電池はこの7.2キロワットアワーの蓄電池にためる。夜はこの蓄電池にたまった電気を使う。それだけでもちょっと心配だったので、燃料電池も導入しました。ガスと水が来れば電気をつくることができます。３電池住宅にするために、とてもお金を使ってしまいました。ついでに、井戸も掘ったのですが、残念ながら、今週水質検査結果がやってきて、飲むには適さない水でした。でも、お手洗いとかお風呂の水には使えるだろうと思っています。一応これでうちの近くの人たちと、それからうちの親戚の人たちを少しは助けられるかなと思っています。

借金だらけの国で、何でも安いほうがいいという国になってきたということは、いざというときの備えは自分がする社会に変わったんだと、覚悟が必要です。とういことで、各人が自助

努力で家族を守ることを考えましょう、と言いたいのです。

柔らかいプリンはよく揺れます。ですから柔らかい地盤はよく揺れます。柔らかい建物もよく揺れるので、柔らかい地盤に建てた柔らかい建物はとても揺れます。ですが、今の私たちの国の耐震基準は、残念ながら建物の揺れに対して安全性をチェックことが一般的です。揺れやすい建物も揺れにくい建物も同じ建物の揺れで設計をしています。だから堅い地盤の上の固い建物がいいんです。壁が多い建物です。小学校や中学校のような壁の多い低い建物が良いです。だから阪神淡路大震災では小中学校の建物は殆ど壊れていません。なのに、小中学校ばかり耐震補強をしちゃったわけです。何だか変です。もうちょっとみんながちゃんと考える力を持たないといけません。柔らかいものが揺れるなんてごく当たり前なのに、同じ揺れだと思って設計をしていることを変だと思う必要があるのですが、縦割りの社会ではそういった疑問を感じにくくなっています。

ですから、建物の安全性は建物の固さとか、地盤の固さによって違います。でも現在は、現行の耐震基準を満足しているものは耐震性があり、現行の耐震基準を満足していないものは耐震性がないという、そういう言い方をしています。何だか知恵がない話です。でも、世の中というのはルールに基づいていますから、そのルールを満足しているかどうかということで、判断しますので仕方がありません。ここはなかなか難しい話です。とにかく私たちは自分自身が賢くならないといけないということです。例えば、よく新しい耐震基準の建物ほど耐震性能は高いと言いますけれども、僕はそうは感じていません。戸建住宅は新しい建物ほどツーバイフォーとかプレハブが増えてきていて、固くなっていて、屋根も軽くなっているから、多分安全でしょう。でも、集合住宅はどんどん柔らかい地盤に建てるようになり、どんどん高い建物をつくるようになり、そしてどんどん技術を使ってコストダウンするようにしているわけです。とするとやっぱり不安です。皆さんの半田の駅前にもこんな建物が増えていませんか。

建物が1,000ガルで揺れることを前提に設計をしているということは、建物が固ければ地盤も1,000ガルで揺れているので、震度７まで面倒を見ているけど、建物が柔らかければ地面の揺れはちっちゃめです。だから建物の固さによって、考えている地面の揺れは違うということです。

昔々は僕たち、計算の技術が余りなかったから、壁を考えて設計することが苦手でした。だから、柱の耐力だけで設計をしていました。結果として、壁がある分だけは余裕が一杯あったわけです。設計で見ていない余力だったわけです。どんどん科学や技術が進んできて、コスト至上主義になると、壁の耐力をばっちり取り込みます。結果としてコストダウンができます。けれど、実質的な建物の実力はどんどん落ちるのかもしれません。すなわち、新しい建物が安全とは限らない。科学技術を投入すると安全になるとは限らないというような、ごく当たり前のことを頭に入れておくかどうかによって、私たちの生き方は随分変わるだろうということです。

昨年末、こんなものが公表されました。南海トラフ地震での長周期の揺れです。半田市も一番揺れる場所になっています。震度の揺れやすさマップでも、半田市はよく揺れています。ですからあの71年前の東南海地震のとき、半田が特にひどくやられたわけです。そのことをしっ

かりと頭に入れた上で対策をする必要がございます。これは、国土交通省から示されたもので、青が一番揺れるところ、赤が次に揺れるところ、緑が余り揺れないところです。僕が住んでいるのは日進ですから、余り揺れません。今日も、余り揺れない日進市民の方々があの辺に来ていらっしゃいます。この辺りに碧南市の人もいます。碧南市はよく揺れる場所にあります。普通は、国土交通省からこういう長周期の揺れが出てくると困るとのことですが、ご安心ください。半田市役所の建物は、先ほど市長さんがおっしゃったとおり、皆さんを守るための建物としてしっかり作ってあります。この建物は実はさっきの真っ赤かの揺れになることを最初から織り込んで設計がしてあります。僕たちも全面協力をさせていただいて、日本中の免震建物の中でも最もグレードの高い仕掛けがちゃんとしてあります。それから一応、津波や高潮が来ても大丈夫なように、盛土してあります。敵の強さを十分に把握して、科学や技術を安全にするために使いさえすれば、十分な対策ができるということです。そういう意味で、半田市役所さんは、建設場所はよくないですが、そのことを十分に考えて素晴らしい建物をつくっています。あの地区には病院もあれば、消防署もあるので、これらの大切なものを守るためにも、本当に安全な建物を１個作っておいて、助けてあげようというような考え方ではないかと拝察をいたします。

ただ、屋上から見た周辺の風景からわかりますように、この場所は木造家屋が比較的たくさんあるので、もし家が燃えたら、燃え広がるだろうなということも想像がつきます。そのときには消防自動車は数が足りないので当然自分で全部火を消すことが必要です。自分で火を消すために必要なことは、けがをしないこと。だから私たち、こういう場所に住む御作法としては絶対に家具の転倒防止をし、家具の下敷きにならない。絶対に家を耐震補強し、家の下敷きにならない。そしてけがをしない状態で自分で消火器を使ってすぐに消す。そういう社会にしないとこれは守り切れないだろうということが、この風景を見ていると感じられるわけです。
東日本大震災では、大阪では震度３の揺れだったのですが、このビルはめちゃくちゃ揺れました。先ほど申し上げた長周期の揺れを受けました。

震源から700キロも離れていたこの大阪府咲洲庁舎も見事に揺れたわけです。

右の人と左の人の揺れ方の違いを見てください。全然揺れ方が違います。さっきも申し上げましたが、壁が多い左の建物のほうが、壁のない右の建物よりずっと揺れが小さいということは明らかです。

高層ビルは、建物の高さの100分の１ぐらい揺れるのが前提で設計していますから、200メートルの建物だったら、往復４メートルなります。今のように揺れておかしくないと分かります。そういうことを意識して高層ビルに住む必要があります。

今のような単純な話、ちゃんと分かりやすく話すと、総理大臣だってちゃんとわかってくれます。実験道具を持っていって建物倒壊の実験をし、紙製の建物のおもちゃで揺すってもらいました。筋交いが入っていると揺れないけど、筋交いを外したらすごく揺れる。単純にわかってくださり、小泉総理は真剣に僕の話を聞いてくれました。これがきっかけになって、10年前に日本中の建物の耐震補強を始めたり、被害を減らす国民運動をしたりすることが広がりました。

それから先ほどの咲洲庁舎、とても揺れてしまいました。そこでなぜ揺れたのかを橋下元知事に説明に行きました。揺れる小道具を持っていき、説明させていただきました。見事に共振現象を説明することができたので、大阪府の咲洲庁舎への引っ越しは中止になりました。

何だか私たちは過去にいろいろ具合の悪いものを持っております。多分、皆さんも持っていると思います。僕も今まで35年ぐらい働いてきましたが、何だかあれはまずいかな、これもまずいかなと思うことはいっぱいあります。今は、まずいかなと思うことについて、なるべく反省しながら皆さんに正直にお話しし、少しでも直そうと思っております。でも、そういうことが苦手なのが男社会です。多分お父様もいっぱい現役時代に反省すべきことがございますよね。奥様にちゃんと伝えていらっしゃいますか。多くの日本人は、それを墓の中まで持っていっちゃうんです。男の人たちはそれが格好いいと思っていますが、子供たちにとってそんなに迷惑なことはありません。実は具合の悪いことはちゃんと奥様にしゃべった後お墓にいってもらわないと、後に残された人たちが後始末ができなくなってしまいます。福島原発のようなことになったのはそんなところにあるような気がします。なかなか走り出したものをとめることはできません。エンブレムもそうでした。新国立競技場もそうでした。そういう社会のままでは、来るべき地震で大変なことになってしまいそうな気がしてなりません。

できるだけ、こういった現状を変えたいと思っています。例えばこれは２回前の東海地震、1854年安政東海地震のときに津波にやられた伊豆の下田です。今、まちをつくり直しちゃったんです。だから次の地震で大変なことになることが、わかっているんです。でも、今住んでいる人たちは財産のこともあるし、引っ越しするのが面倒なので、なかなかそのことを言いにくいんです。この翌日、南海地震が起きました。この大阪のまち、津波が襲いました。今は、そこに大切なものがいっぱい建っています。大阪の大正橋の辺には、絶対津波のことを忘れるなという石碑まで立っています。にもかかわらず、多くの大阪人は忘れちゃったんです。それが人間の「さが」なんだと思います。人間というのは都合の悪いことは忘れやすい生物です。

翌年1855年、江戸直下で地震が起きました。ひどくやられた場所は日比谷の入江という海を埋め立てた場所です。その場所のことを現在、大手町、丸の内、有楽町、日比谷、新橋といいます。そこに、高層ビルが林立をしています。この地震で水戸藩江戸屋敷が潰れて、藤田東湖や戸田忠太夫が死んで、水戸の尊王攘夷派は力を失い、そして、井伊直弼の時代へと変わってまいりました。たった５年間の間に小田原、伊賀上野、東海、南海、豊予海峡、飛騨、陸前、江戸、八戸沖、芸予、飛越と地震が続発しました。江戸の大暴風雨や、コレラの流行も起き、社会が混乱しました。それを抑えるために吉田松陰を処刑しました。でも、それではおさまらなくて江戸が終わりました。そのときにペリーやハリスがやってきました。黄金の国だと思ってやってきたら災害だらけです。だから日本だけ植民地にならなかったような気もします。私のうがった歴史観です。

この安政の東海地震のとき、この半田もめちゃくちゃにやられました。そのとき中埜家の人たちは皆さんのまちを復興させるために、あの大豪邸をおつくりになりました。そこですね。あの大豪邸のお庭をつくるために、みんなに仕事をつくってあげる。それで半田のまちを立て直そうとされました。そんなすごい歴史が半田のまちには残っています。

私たちの国は、こんなふうに人口が増えてまいりました。ここで貞観の地震、ここで東北の地震が起きたわけです。その間、定期的に南海トラフの地震がやってきました。これらの南海トラフ地震がやってきたとき、見事に大河ドラマの時期と重なります。戦争の時期、江戸末期、元禄、これは「国盗り物語」のときです。ですが、大河ドラマでは１回も地震が起きません。学校の教科書でも、さっきのような地震のことを１つも勉強しません。だから日本人は大事なことを知らないでいるんです。歴史の先生方は、地震の勉強をしないんです。だから、地震とおつき合いしないといけない国にもかかわらず、地震の歴史を知らないので、僕たち日本人は地震を人ごとだと思ってしまっているんだと思います。何だか心配です。

そういう中、これからどんどん人口分布が変わっていっちゃうわけです。若者の人口が減った頃に、地震がやってきます。としたら、今の子どもたちは一体どうなるんでしょうか。もう一度復習すると、400年前の地震群で「国盗り物語」の時代が終わっていきました。300年前の地震群で元禄の時代が終わっていきました。２回前の地震群で江戸が終わっていきました。１回前の地震群で戦争が始まって、戦争が終わっていったと感じます。そんなことを実感してもらうために、私たち名古屋大学のメンバーで、こんな「歴史地震探索まち歩きガイドその２　半田市役所・住吉町・半田口編」というのをつくっています。斎藤防災監によると、窓口に500あるそうですから、欲しい人はこれを持ちながら、帰り、散策しながら歩いていってみてください。このまちの中にある地震にかかわる史跡がわかります。半田のまちが如何に歴史豊かなまちか感じていただけると思います。

実は、僕は今日、ここへ一時間前にやってきて、地震でお亡くなりになった方のお参りをしてまいりました。お参りをしていない人は帰り、歩いて10分ぐらいのところに雁宿公園という公園がございますのでお立ち寄り下さい。雁宿公園の中には、この３つの石碑がございます。いずれも戦災と、それから東南海地震で犠牲になった方々を慰霊する碑になっています。こういう碑がこんなに３つも立派に並んでいる場所は、多分この東海地区ではこの場所だけだと思います。それだけこの半田は本当に大変な思いをされたんだということを、皆さんは実感ください。

雁宿公園のこの慰霊碑、お参りしたことのある人だけ、手を挙げてみてください。はい、結構いらっしゃいます。カブトビールに行く歴史好きの人は、この雁宿公園にも出かけていただきたいと思っております。

それから、僕は立派だなと思ったのは、こういうふうに碑の前に、どういう経緯でできた碑なのかということを伝える説明が大変丁寧に書かれておりました。こういったことができているまちというのは、素晴らしいと思います。

さて、この３つの絵は、左から300年前、160年前、そして90年前に東京を襲った地震のときの震度分布であります。いつも揺れているのは東京駅前、大手町、丸の内、有楽町、日比谷、新橋です。関東地震では７万人も死にました。元禄関東地震ではたった340人です。東京だけが200倍死にました。東京以外のまちは、元禄の地震のほうがたくさん人が死んでいます。理由は単純です。元禄の時代までは東京の西側に主に人が住んでいました。その後、東側にまちを広げました。この７万人のうち、東京の西側で家が潰れて死んだ人はたった1,500人です。

元禄の時代と関東地震のときとの人口の比を考えると、1,500人ぐらいというのは理解できます。ということは、７万人も人が死んでしまった理由は、まちを危険度の高い東に広げたからです。これが遠因となって日本は昭和の金融恐慌を起こし、そして戦争始め、300万人もの犠牲者を出すことになりました。要は、まちづくりが原因だった可能性があります。その危険な江東地区でやろうとしているのが東京オリンピックです。それが東京的な発想になります。

関東地震の時の映像をご覧下さい。こういう瀟洒な東京駅前のまちは、一瞬の揺れで物すごいことになってしまいました。これは地盤が柔らかかったからということになります。これが今から200年前の東京の風景、江戸一目図です。このときは7,000人の犠牲者でした。大名屋敷が多く、のどかです。100年間でここまで密集させて、７万人が命をこのまちで落としました。現在は、ここまでやってしまいました。大事な子供たちを出すには覚悟が必要です。僕は必死で子どもたちが出ていかないように話しをしています。でも魅力的なので出ていきたがります。困ります。一番危険な東京駅前は、こんなに高層ビルだらけになってしまいました。心配です。大手町の危険な場所に建っているのが気象庁と東京消防庁です。そして、危険度の高い赤い三角形の場所に、東京スカイツリーをつくりました。最も大切なデジタルタワーを危険な場所に建ててしまいました。

一方で、倹約家で田舎者の愛知県民はどうしたかというと、人が寄りつかない瀬戸の小山の上にデジタルタワーをつくりました。設計者は同じ事務所です。地域の価値観の違いで、こうも違うものがつくられます。僕はこの愛知のほうが好きです。

昨年５月30日の地震で東京だけ赤色です。この地震は、震源はここです。ここから距離は同じなのに、東京周辺が良く揺れました。どうしてこういった場所にあらゆるものを集中させたのでしょうか。日本人は皆、自分の意思でここへ行っちゃうんです。どうしてでしょう。地域がいけないんでしょうか。若者に地域の魅力をつくってあげられていないんでしょうか。何とか東京一極集中をとめないと、ここの災害で日本中がやられてしまい、この国がやっていけなくなってしまいそうです。

名古屋は救世主だと思います。同じマグニチュード7.9の地震で、同じぐらい住んでいたけれど、東京では７万人死んだんですが、東南海地震では名古屋では121人しか死んでいないんです。500倍違います。理由は単純です。台地の上に住んでいた。耐震化していた。そして戦時下だったから、みんな自分で火を消した。そういう力さえあれば災害は怖くありません。半田の犠牲者が多かった理由は、あの山方工場の耐震安全性が低く、揺れが強かったから。

東京は、みんな憧れますけれども、結婚率は低いし、出生率も低いんです。日本中で生まれているたくさんの子どもたちが東京へ行っちゃうと、子どもが生まれなくて、私たちの国は人口が減少していって、先行きが暗い状況になります。これでは悪循環で、具合が悪いと思います。一方で、ちゃんと半田に子どもが残れば、結婚し子どもを産んでくれます。特に愛知の西三河は日本で一番たくさん子どもが生まれているところです。多分、今日いらっしゃっている方々もたくさん子どもを産んでいらっしゃると思います。お子さんが３人以上いる人だけ手を挙げてみてください。お子さんが３人以上いる家庭。結構います。我が家も３人以上です。

三大都市を比べてみると、東京や大阪って、とても危険なところに企業の大事なものが多い

のに対して、私たち愛知は安全なところに大事な企業の本社があります。けちなので、古い低い建物を使い続けていて高い建物は余りありません。安全な場所の上に低い建物だから、まちの実力は圧倒的に高いわけです。そして県庁や名古屋市役所も含めてけちなので、こういう高い建物にはしません。ちゃんと神田知事さんの時代、この建物の下に免震装置をつけてくれました。だから上屋を全く直さずに安全にすることができました。おかげで現在、この建物は重要文化財になっております。お隣の名古屋市役所も免震にしたので重要文化財になっております。そしてまちのど真ん中に防災道路の100メートル道路があり、日本一安全な場所に官庁街があります。どう考えたって、東京がやられたときここが代わりになるわけです。首都になっても大丈夫なような準備を僕たちはしておかないといけない。ちゃんと霞が関官庁街をつくってあげられるように、空き地をつくっておいてあげないといけないかもしれません。

そして、我がまちはすごいまちであります。ノーベル賞をとった人のほとんどは、この中部で生まれ、育ったた人たちです。特に半田は、すごい人をたくさん育てています。南吉だけではありません。経団連会長だった平岩外四さん、現会長の榊原さん、そして名古屋大学の総長をやっていた平野先生、みんな半田高校出身です。来週、僕は半田高校でまた講義をするために、また半田にやってまいります。今後、半田の力を全国に伝えていくことが大切だと思っています。

私たちはみんなで社会を安全にするような運動をやれるといいなと思っていて、市町村の人たちが連携する場作りもしています。先週１月８日に、西三河地区の９市１町の10人の副市長・副町長さん全員に集まってもらって、こんなふうに減災館の中で、西三河をどういうふうに直していけばいいだろうかという大ワークショップをやりました。全部で100人ぐらいの人が集まって、こんな絵をつくりました。この絵は、めちゃくちゃ大きな絵であります。たたみ20畳分ぐらいあるでしょうか。これが高見の見学をしている副市長さん、副町長さんたちで、下で一生懸命、担当の方々が働いているところです。こういうふうにしていくと、自分の市のことしか考えていなかった副市長さんたちが、お隣のことを考えずに何と矛盾したことをしていたんだろうと気がついてくれます。そして、隣同士でちょっと手を組んでみようかなという気分になってくるようであります。こんなことをして、少しでも地域の総力をつくっていきたいと思っています。地域の力というのは結局、人材の力と資源の力と情報です。人材の力というのは能力もありますけど、もっとずっと大事なのはやる気と連携力です。このやる気と連携力のもとは何かというと、地元愛です。この地元愛のもとは歴史と文化と伝統です。この半田は歴史も文化も伝統もあります。あと、もう一つ大切なのは物語力です。人の感情に訴えかけ人を動かす力、これがとても大切になります。

今日お集りの防災大好きな方々は、ぜひこの力をつくっていただいて、多くの人たちを育て巻き込んでいってほしいと思います。私たちは、災害を減らすことで災害を克服し、それによってルネッサンスのような新しい社会をつくっていきたいと思っています。そのためにシンクタンクとして減災連携研究センターをつくり、アゴラとして減災館という建物をつくってみました。そこでやろうとしているのは３つのＪ、自由闊達に、地道に活動し、地元を大事にする。３つのＡ、頭を使い、汗をかき、しっかりと愛を振りまく。３つのＰ、しっかりとしたプレー

ヤーをつくり、よいプランをつくり、具体的なプロダクトをつくる。そして３つのＡｎ、情報をしっかりキャッチし、分析し、きっちりと回答を出していく。この最後の緑色が大事だと思っています。地元に対する愛情をしっかりと持って、具体的な答えをプロダクトとして生み出していく。そういう活動をすることによって、この国が不幸せにならないようにし、そして明るい未来をつくっていく。それをそれぞれの地域から始めていくことが大切だと思っております。ぜひ皆さんも、しっかりと連携し、そして総力を結集して、この半田のまち、そしてこの知多、そして愛知が安全で、そして魅力的なまちになるように力添えをいただければと思います。

以上です。どうもありがとうございました。

◎講演②

講演者：認定特定非営利活動法人レスキューストックヤード代表理事　栗田暢之
演　題：「災害ボランティアと避難所運営について」

栗田暢之氏

皆さん、こんにちは。

少しご無沙汰した方もたくさんいらっしゃって、懐かしいお顔もさまざまお見受けします。そもそも半田の皆さんは各地域でしっかりと防災対策の取り組みをしていらっしゃいますし、全国的にも賞を取られるなどの有名な地域もたくさんあって、そういうところがさらに手綱を締めようという取り組みだと思うんです。福和先生はめちゃくちゃ言われましたけれども、福和先生はそういう役割なので、またしっかりと受けとめなければいけないというのはもちろんございます。ところが来るものは来るので、どうすればいいのかということを私なりの現場での体験をもとに、お話しさせていただきたいと思っていますが、やっぱり地域力なんですね。ご案内しましたとおり、地域でしっかりと取り組んでいらっしゃるということはありますが、結局その地域とは何ぞやみたいなところもあって、さまざまなその現場を見ると、やっぱり地域のつながりが強いところとそうでないところの事後対応が全然違う。特に今日の本題であります避難所運営というところに関しましては、相当な差が出てくるということです。ですから、今日の話の中で、さまざまな現場でのヒントがもしあるならば、それを今後にぜひ生かしていただきたいというふうに思っている次第でございます。

昨年の９月に関東東北豪雨がございまして、皆さん、ご存じでしたかね。線状降水帯とかいう棒状に雨を降らす雲ですね。それが長い時間停滞していて上に行ったということで、茨城、そして栃木、宮城が大変な被害に遭ったということがございました。我々、災害現場へ行きますと、水害の場合は本当に局所的な場合が多くて、広域な取り組みというのは、水害では今回が初めてというような気がします。記憶に新しいところでは広島の土砂災害がございましたが、